

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：14302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24653180

研究課題名(和文) 教員養成教育におけるアーリーエクスポージャーに関する介入効果検証

研究課題名(英文) Intervention effect on early exposure in teacher training education

研究代表者

小林 稔(Kobayashi, Minoru)

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70336353

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教員養成教育における学校現場の早期体験の効果検証することを主な目的とした。まず始めに量的な指標となる「自己決定理論による教員志望動機尺度」を作成した。次に早期体験の介入として、教員を志望する大学1年生を約1ヶ月間、学校現場に行かせた。その結果、動機づけに関する量的な検証では、統計的に有意な差はみとめられなかったが、質的な変化としての効果が一部認められた。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed to verify the intervention effect on early exposure program in teacher training education. First, quantitative index of “motivation scale on teacher-training students based on self-determination theory” was developed. An early exposure intervention program was then implemented to the first-grade students of teacher training for 1 month at their campus. As the results, there were no statistical significant differences in students' motivation, but some changes were qualitatively discovered.

研究分野：教師教育

キーワード：教員養成 早期体験

1. 研究開始当初の背景

近年、教員養成教育では実践的指導力の向上が求められており、教員養成系大学を中心に、初年次より学校現場体験を導入する機関が増加している。他方、医学教育や薬学教育等では初年次の体験活動をアーリーエクスポージャー（早期臨床体験実習）として位置づけ、すでに10年以上にわたって実施されている。アーリーエクスポージャーは、専門職に対する動機づけの向上とその後の理論知の獲得において、きわめて重要、且つ教育効果の高い体験活動と言われている。研究代表者は以前、所属した琉球大学において、平成20年度から3年間にわたって「模擬学校による教育実践力向上モデルの開発」のテーマで、文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」の事業を行った（研究代表者は、事業推進責任者）。4年次を対象とする教職実践演習に関するプロジェクトであったにも関わらず、多くの1年次がこの「模擬学校」に参加していた。外部評価委員を交えた総括的評価では、全体として教育実践力の向上が認められ、一定の教育効果が表出したと判断された。特筆すべきは、どちらかというが高年次よりはむしろ低年次に教育効果が高かったという評価が参加学生や大学教員から多く寄せられた。よって研究代表者らはこのプロジェクトが、教員養成教育におけるアーリーエクスポージャーとして有効な授業になると考えた。

本研究では、この事業を発展させ、これまで以上に早期に学校現場体験を実施する。さらに、その教育効果を学術的研究レベル、すなわち量的・質的側面から検証する。

2. 研究の目的

本研究では、大学入門期における医学教育モデルの一部を教員養成教育に適用し、「教員養成系大学における初年次の学校現場体験がどのような教育効果を生むのか。」また、「初年次の模擬学校体験が教員養成のアーリーエクスポージャーと成りうるのか。」について量的・質的評価により明らかにすることである。

3. 研究の方法

研究方法は2段階で行った。第1段階として、「教員志望動機づけ尺度」を開発し、第2段階として、アーリーエクスポージャーの介入のため、教職を志望して大学に入学した学生を1年次早期に学校現場体験をさせた。

(1) 自己決定理論に基づいた教員志望動機づけ尺度の開発（以下、教員志望動機づけ尺度）について

調査期日：2014年3月下旬から5月中旬に実施した。

対象：国立大学2校、私立大学1校の教職志望学生1,432名であった。

内容と手続き：

日常より教職を専門に研究指導する大学教員3名のディスカッションにより、自己

決定理論に基づく54項目の質問項目を設けた。また、併存的妥当性を検討するため、同じ質問紙内（自記式質問紙）に教師効力感尺度（前原ら,2007）を挿入した。

4. 研究成果

(1) 探索的因子分析の結果

表1

	因子行列 ^{a)}				
	1	2	3	4	5
Q12	.680	-.138	-.266	.064	.226
Q38	.678	-.105	-.181	.116	.210
Q35	.654	.013	.131	-.106	-.012
Q48	.606	.001	-.073	.129	.224
Q11	.606	-.107	-.300	.099	.199
Q5	-.602	.326	.059	.111	.339
Q43	.597	-.108	-.314	.115	.179
Q33	.595	.060	-.067	-.008	.021
Q26	-.577	.394	.210	-.040	.191
Q3	-.575	.298	.169	.161	.383
Q31	-.573	.270	.094	.257	.362
Q40	.569	.152	-.039	.219	.116
Q7	.564	.005	-.134	.120	.150
Q34	.558	.085	-.129	-.192	-.215
Q2	.546	-.082	.155	-.174	-.049
Q15	.535	.176	.233	-.172	.025
Q29	.525	-.032	-.253	.166	.222
Q53	-.514	.431	.084	.053	.187
Q21	.512	.199	.039	.160	.304
Q4	.508	.061	.054	.098	.202
Q46	.505	.217	.138	-.194	.074
Q20	.488	.166	.334	-.025	.102
Q25	.458	.188	-.080	.045	-.028
Q16	.436	.265	.152	.122	.151
Q30	.431	-.050	.019	.065	-.093
Q13	.420	.245	.036	-.023	.177
Q1	.377	.023	-.152	-.167	-.202
Q37	.306	.216	-.019	.085	.190
Q45	-.062	.732	-.207	-.254	-.073
Q39	.003	.667	-.234	-.268	-.042
Q36	-.012	.653	-.206	-.304	-.070
Q52	.155	.636	-.087	.037	-.047
Q47	.082	.627	-.141	-.310	-.018
Q54	-.177	.617	-.099	-.185	-.026
Q49	.011	.615	-.141	-.178	.035
Q42	.049	.614	-.188	-.069	.024
Q27	-.143	.584	-.046	.106	.009
Q41	.188	.583	-.098	.138	-.029
Q44	.278	.549	-.137	.110	-.039
Q32	.073	.530	-.036	.372	-.141
Q51	.108	.486	-.101	-.123	.026
Q23	-.091	.462	-.052	.059	.066
Q22	.033	.451	.105	.014	.118
Q8	.151	.417	.133	.361	-.248
Q9	.080	.391	.060	.266	-.136
Q24	-.022	.324	.062	-.036	.054
Q18	.288	.319	.137	.097	.069
Q28	.011	.210	-.056	.010	-.072
Q17	.414	.226	.572	-.154	.019
Q14	.437	.158	.549	-.110	.058
Q10	.441	.054	.541	-.207	-.071
Q19	.447	.251	.451	-.105	.097
Q50	.138	.436	.136	.547	-.367
Q6	.143	.339	.070	.471	-.358

因子抽出法：最尤法

a. 5個の因子が抽出されました。5回の反復が必要です。

項目分析の後、探索的因子分析を実施した。その結果、5因子（内発的動機づけ・自

一化的調整・取り入れ調整・外的調整・非動機づけ) 26項目が抽出された。具体的には、【内発的動機づけ3項目(・教室で教えることが好きだから・教えること自体に喜びを感じるから・教えることが楽しいから。)、【同一化的調整7項目(・子どもが成長するのを手助けしたいから・自分が教えた子どもの成長を見てみたいから・人とかがかわる職業に就きたいから・人間を育てるすばらしい職だと思ふから・社会発展に貢献することができるから・たくさんの人とふれあう時間があるから・価値のある職業だから。)、【取り入れ調整7項目(・先生にならないと世間体が悪いから・教員にならないと自分を恥ずかしく思うから・教員にならないと自分をダメな人間と思ってしまうから・もし、その職に就かないのなら幸せにならないから・担当の先生に良い学生と思われたいから・まわりが教員をめざしているから・立派になったとみんなに思ってもらえるから。)、【外的調整4項目(・給与が安定しているから・職が安定しているから・給料に魅力を感じるから・長期休みが多いから。)、【非動機づけ5項目(・今はなるつもりはない。もともと教員になるつもりはなかったから・今はなるつもりはない。人に教えることは難しいから・今はなるつもりはない。教員にまったく魅力を感じないから・今はなるつもりはない。子どもが好きでないから・今は、なるつもりはない。人とのかかわりが苦手だから。】

(2) 介入効果(量的・質的)について

介入効果を検討するため、まず量的には介入前後において、本研究の第1段階で開発した教員志望動機づけ尺度を実施し、その変化を明らかにした。一方、質的な視点については、介入に参加した学生が、介入前後に記した自由記述文を大学教員が(どのように変容したかを)主観的に評価した。なお、自由記述文を書くにあたって、学生には、学校・子ども・教師という3つのキーワードについて記すよう指示した。

介入前後における教員志望動機について (Wilcoxonの符号付き順位検定)

次の表で明らかかなように介入前後における動機づけの変容はみられなかった。すなわち、量的な効果は認められなかった。

表2

介入前後における教員志望動機づけ尺度の得点結果 (Wilcoxonの符号付き順位検定)			
	Pre	Post	P
内発的動機づけ(n=6)	10.5(10.0-13.0)	11.5(10.0-13.0)	.999
同一化的調整(n=6)	30.0(24.0-31.5)	28.5(27.0-31.5)	.746
取り入れ調整(n=6)	7.0(7.0-9.0)	8.5(7.0-10.3)	.414
外的調整(n=6)	7.5(3.8-10.5)	9.0(5.0-11.3)	.257
非動機づけ(n=6)	9.5(8.0-10.3)	9.5(9.0-10.5)	.680
中央値(四分位範囲)			

大学教員による自由記述文の評価

一部ではあるが、「事前」と「事後」で変容が明らかにみられる箇所のみ、次の通りピックアップ(原文のまま)すると同時に、各々の学生の記述変化について、最後の四角囲み内に如何に質的に変容したのかをまとめる。

【事例1:A.H.】

・学校とは
(事前)

学校とは子どもが集団生活を行う場所であり、その集団生活を通して、子どもたちの考え方の視野を広げたり、個としての自分を見つけ、成長を促したりする役割がある機関であると考え。例えば学校がなく一人で勉強するとする、その子どもは自分が考えた道筋でしか答えを見つけ出すことができない。一人で学ぶことは、その人の中での考え方が生まれず、異なった角度での考え方が生まれない。一方で集団生活をするという事は、自分以外の考え方に触れる機会が多くなる。勉強を集団ですると、自分の考えと他人の考えを共有でき、一人では思いつかないような考え方に遭遇できる。そのことで考え方の視野を広げることができ、個人として成長することができる。また、集団生活を通し、他人と自分を比較することで、より一層自分を知ることができるようになる。その中で、自分の不得意なところや良くないところを改善したり、特異な事やいいところを伸ばしたりできる。そうすることで自分に自信を持つ事ができることにつながる。このように集団生活をする学校とは、子どもの考え方の視野を広げ、個人としての自分をみつけ、より子どもたちを成長させる場であると考え。

(事後)

学校とは子どもたちが教師からいろいろなことを教わったり、ほかの子どもたちとかがわりあったりする場以外にも様々な経験をさせることで子どもたちを成長させる場所だと考える。今回の朝の活動で、子どもは教室にいる子どもと話すだけでなく、朝顔に水やりをやりたり、上級生が下級生に折り鶴を折ってほしいことを頼んだりする場面が見受けられた。私は学校とは教師からいろいろ学んだり、授業の中で勉強したり、同じクラスの人と一緒に遊んだりする場所というイメージがあった。確かに、教師から学ぶこともあり、クラスの人と一緒に遊んだりすることもある。しかしそれ以外にも様々なことをやって、そこから子どもたち経験を積んでいるということを改めて感じた。たとえば、朝顔に水をやることは植物を大切にすることの大切さを学ぶことができる。また、誰かが水やりを忘れていたら代わりに誰かがやってあげたり、やっていないことを伝えてあげたりすることも経験できる。また、上級生が下級生に折り鶴を折るのを頼む場面でも、上級生は人に頼む方法を学び、下級生もその姿から人に頼む方法を覚える。これも学校生活ならではの経験だと考える。以上より学校

とは様々な経験をさせることで子どもたちを成長させる場所だと考える。

事前では、主に集団生活を通して子どもが成長することを述べているが、全体的には「個人として成長することができる」とあるように、個に焦点をあてた記述になっている。しかしながら、学校現場を経験したことにより、「(中略)さまざまな経験をさせることで子どもたちを成長させる場所」と書いている。つまり、視点が個から全体に変容していると言える。また、学校現場を経験した顕著な部分として、例えば、「朝顔に水やりをやったり、上級生が下級生に折り鶴を折ってほしいことを頼んだりする場面が見受けられた。」とあるように、体験した具体的な場面が述べられている。

・子どもとは (事前)

子どもとは、無限の可能性を持っているが、周りの環境やかかわる人によって簡単に影響されると考える。例えば、大都市の学校と僻地の学校について考える。大都市の学校は生徒数が多く、また高い学費を払うことで充実した施設でいい先生を集めている私学の学校もある。生徒数が多いと勉強やスポーツなど、様々な人から刺激を受け、可能性を高めあうことができる。また、いい先生やコーチが多いことも可能性を伸ばせるかどうかにおいて重要なことである。さらに、勉強においては自習室など勉強できる環境や質問ができる環境が整っているか、スポーツにおいてはグラウンドやトレーニングルームなどの設備が整っているかなども可能性をさらに伸ばすことができる要因だと考える。一方僻地の学校では生徒数、教師の数ともに少なく、廃校になる学校も少なくない。また大都市のような十分整った設備もない。たとえ同じ子どもでも大都市の学校に行くと僻地の学校に行くのとでは、才能の伸び方が違うと考えられる。以上より子どもとは、無限の可能性を持っているが、周りの環境にかかわる人によって簡単に影響されると考える。

(事後)

子どもとはすでに個性がしっかりあり、学校での過ごし方や、教師とのかかわり方でいいほうにも悪いほうにもなってしまう存在だと考える。今回の朝の活動で、クラス内の様々な子どもたちと話す機会があった。その中で子どもにはすでに個性がはっきり出ているなと感じた。たとえば、週末の出来事を子どもたちに問いかけたときに、ある子はこんなことがあった、あんなことがあった。などたくさん自分を話してくれた。しかし、聞いても自分のしていることを続けたり、ただうなずくだけで問いかけに答えられなかったりした子どももいた。

自分の中では個性がでてくるのはもう少し大きくなってからでと思っていたが、すでに個性ははっきりしていると感じた。しかし、この個性は学校生活や教師とのかかわりで良くも悪くもなってしまうと考える。それは、席替え前にいたときはとても静かでありしゃべらなかつた子が、席替え後で周りの友達が変わった状態だと、その友達と一緒によくしゃべってくれるようになっていたからである。私はこの変化に驚くとともに、子どもは周りの環境に影響されやすいと考える。

以上より、子どもとはすでに個性がしっかりあり、学校での過ごし方や教師とのかかわり方でいいほうにも悪いほうにもなってしまう存在だと考える。

前項の「学校とは」と同様に、事前では例えば、大都市と僻地校の比較を記述するなど、一般的なことしか述べられていないが、(これは学校現場の経験がないので、当然といえば当然である)事後においては、クラス内のさまざまな子どもたちとの会話や席替えの前後の子どもの様相を引用しながら、この発達段階においても個性を有しているとの結論を導いている。すなわち、教員のライフステージ全般において常に省察の対象となる3つのキーワードを具体的な場面に即して、振り返っていることから、入学して間もない時期にもかかわらず、質の高い思考になっていると判断できる。

・教師とは (事前)

教師とは、子どもの人生を変えるほどの影響力を持つため、様々な経験をしておくべき職業だと考える。担当する子どもたちは、性格や得意不得意など一人ひとり違う。そのため一人ひとりへの対応の仕方も違ってくる。例えば、野球選手になりたいという同じ夢を持っている子どもが2人いても、それぞれの性格や能力がちがうため教師が子どもにするアドバイスも変わってくる。また、野球選手のような職業はなるのが難しいからあきらめろ、と教師が子どもに言うとする、本来野球選手になる力がある子どもが夢をあきらめてしまうかもしれない。このように教師は子どもの人生を変える可能性もあり、またそのアドバイスが適切でないために夢を叶えられなくしてしまう可能性もある。子どもたちの人生をいい方向にもっていけるように一人一人アドバイスするためには、アドバイスする側が様々な経験をしておく必要がある。何かを真剣に取り組んだり、苦手なことを克服しようとしたりした自身の経験が説得力のあるアドバイスとなり、また、無責任なことは言わなくなるはずである。以上より教師とは子どもの人生を変えるほどの影響力をもつため、様々な経験をしておくべき職業だと考える。

(事後)

教師とは将来的に必要な考え方を、子どものうちから考えさせ、また教えていく職業だと考える。今回の朝の活動で、担任の先生は問題が発生した時に、子どもたちに問題点を問いかけ、子どもたちにどうすれば解決できるかを考えさせる場面が何度もあった。時には子どもたちと一緒にその場面を作り出して視覚的に状況をわかる場面をつくり、より具体的に問題意識を持たせたり、また時には子どもたちに手を挙げさせて、子どもたちのみに任せたりすることがあった。子どもたちが悩んだり、もう意見が出なかつたりすると、教師が助け舟を出して、子どもたちに解決方法を教えていた。そうすることで子どもたちは自分以外の問題でもまるで自分の問題でもあるかのように、一生懸命解決方法を考えているように見え、また教師が助け舟を出してくれるので、より一層問題について子どもたちが考えることができたように思えた。さらに、子どもが忘れ物など失敗をしてしまったときに、怒るのではなく、失敗を失敗で終わらせず次に生かしていくことなどを教えていた。これは、将来的にとっても重要なことである。以上より教師とは将来的に必要な考え方を、子どものうちから考えさせ、また教えていく職業だと考える。

教員養成においてアーリーエクスポージャーに参加する学生は、学校現場の経験はもとより、大学で過ごした時間的な経過があまりなく、教師に対するイメージはこれまでの経験によるところが大きいと考えられる。したがって、事前では、例えば、「子どもの夢」を例に子ども側からの視点、あるいは一般的な気づきの記述が展開されているが、事後では、教師側からの視点での記載(具体的には、「将来的に必要な考え方を、子どものうちから考えさせ、また教えていく職業だと考える。」)という変容が見受けられる。

以上、質的な点で学生の変容を捉えてみるとそれは明白であり、総じて、早期体験(アーリーエクスポージャー)の効果が認められる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

(1) 岩田昌太郎、久保研二、生関文翔、渡辺駿、池浦このみ、川口諒、高島亜由美、宮武遼、教員養成におけるe-ポートフォリオ・システムの実態と課題に関する事例研究：日米の二つの大学を比較検討して、学校教育実践学研究、査読無、20巻、2014、38-41

(2) 岩田昌太郎、齊藤一彦、前田一篤、山木彩加、手島祥平、中山泉、修士課程段階におけるアクションリサーチ型実習の効果に

関する事例的検討：保健体育科実習生の授業についての知識と教授方法の変容に着目して、学校教育実践学研究、査読無、20巻、2014、141-151

(3) 小林稔、大学による「学び続ける教員の支援」：学生への学びの支援だけでなく、現職教員に対する支援強化へのパラダイムシフト、SYNAPSE、査読無、36巻、2014、28-32

(4) 久保研二、木原成一郎、岩田昌太郎、教員養成課程の体育の授業科目におけるポートフォリオ活用に関する一考察：学生と大学教員の振り返りに着目して、体育科教育学研究、査読有、30巻、2014、13-23

(5) Kobayashi M., Gushiken T., Ganaha Y., Sasazawa Y., Iwata S., Takemura A., Fujita T., Asikin Y., Takakura M., Reliability and Validity of the Multidimensional Scale of Life Skill in Late Childhood, Education Sciences、査読有、3巻、2013、99-104

(6) 嘉数健悟、岩田昌太郎、教員養成段階における体育授業観の変容に関する研究：教育実習前後に着目して、体育科教育学研究、査読有、29巻、2013、35-48

[学会発表](計3件)

小林稔、質問紙調査「教員養成教育のアクレディテーション基準に関する意識調査について」、東京学芸大学「教員養成教育の評価等に関する調査研究」フォーラム、2013、東京

Kobayashi M., Nanbu M., Urano H., Mitsuhashi K., Inoue H., Endo H., Yogi Y., Ganaha Y., Study on the Effect of Collaboration and Reflective Action-Derive Workshop-Based On Campus Training on Teaching Ability, The World Association of Lesson Studies(WALS)、2012、Singapore

Shotaro I., Maeda K., Kakazu K., The Research a trend on Physical Education Pre-serviced Education Curriculum Assessment in Japan: a focus on the Hiroshima University Model, The World Association of Lesson Studies(WALS)、2012、Singapore

[図書](計0件)

[産業財産権] 出願状況(計0件)

[その他] ホームページ等・特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 稔 (KOBAYASHI, Minoru)

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70336353

(2) 研究分担者

遠藤 洋志 (ENDO, Hiroshi)

琉球大学・教育学部・教授

研究者番号：90369926

岩田 昌太郎 (IWATA, Shotaro)

広島大学大学院・教育学研究科・准教授

研究者番号：50433090